論文

母たちの昭和史――高久タケ・柏原シゲ――

高久嶺之介

はじめに

一九四五年(昭和二〇)八月の敗戦、それから二年後の年、一九四七年(昭和二二)に高久嶺之介[1]および俊子は生まれた。嶺之介は九月九日、高久四郎・タケの二男(末子)として秋田県雄勝郡湯沢町湯の原の地で、俊子はそれより五カ月早い四月九日、柏原常松・シゲの二女として、岩手県和賀郡岩崎村の和賀仙人鉱業所の社宅で生まれた。嶺之介・俊子は、ともに秋田県雄勝郡湯沢町立湯沢西小学校、湯沢市立湯沢中学校(一九五四年〔昭和二九〕、湯沢町が周辺五村と合併し湯沢市になったため中学校は市立になる)、秋田県立湯沢高等学校(高校三年生ではじめて同級生になる)に進み、その後一九七二年(昭和四七)四月二日に結婚する。

本稿は、嶺之介の母タケ、俊子の母シゲの昭和戦前期を中心にした昭和史であり、近代の庶民の女性達の多様な生き方を、大正から昭和戦前期の時代背景をもとに描く試みである。時代背景として特に注目したいのは、次の点である。

①大正から昭和初期にかけての都市(とりわけ大都会)への移動傾向、都市(町)の給料生活者(サラリーマン)への憧れの増大

②女子の進学熱の増大、にもかかわらず女子に教育はいらないという風潮の強力な残存

③地主層の没落傾向と自作農創設運動や経済更生運動を通して農村中堅層の進出

④家意識

⑤戦争

⑤に関して言えば、一九三一年(昭和六)の満州事変、一九三七年(昭和一二)以降の日中戦争から敗戦まで、戦争をめぐる庶民を対象にした研究は無数にある。しかし、本稿では、上記①～④も念頭におきながら、母たち二人の昭和史を描いてみたい。もちろん母たちの歴史は父たちの歴史を部分的に描くことになる。

なお、本稿に前提をつけておきたい。第一に、「戸籍[2]」を除けば、

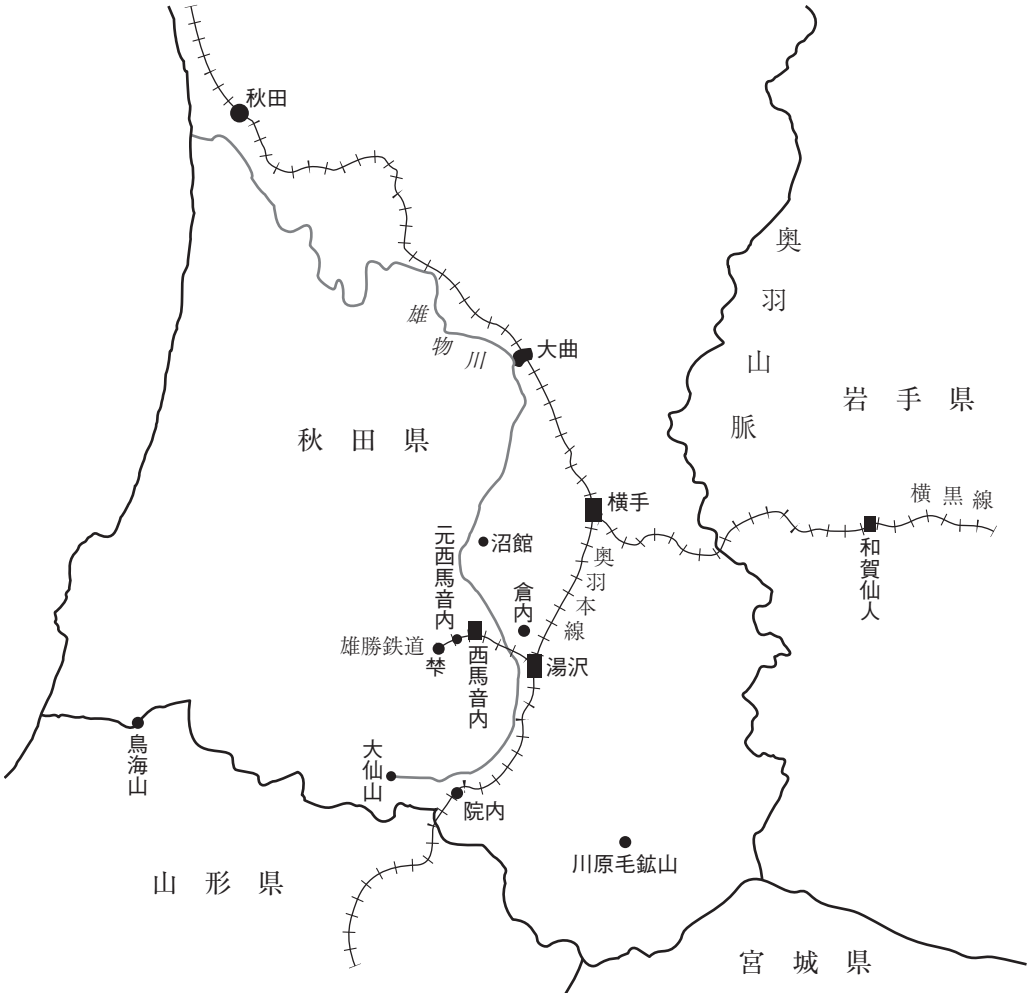

図1　昭和10年代の湯沢周辺図

文字資料は圧倒的に少なく、本稿の叙述は親族への聞き取りを中心に行った。この聞き取りは、最初は二〇〇六年に行い。さらに二〇一六年追加的に行われている。[3] 第二に、叙述は敗戦後数年までを中心に描く。第三に敬称はすべて略する。

一　タケの昭和史

(1)雄勝郡西馬音内町と佐藤家

①タケの出生

佐藤タケ[4]は、一九一二年(明治四五)七月二五日、秋田県雄勝郡西馬音内(にしもない)村(現羽後町西馬音内)本町の地主・金物屋大黒屋(元は造り酒屋)佐藤金蔵・ツネの三女(二男四女)として生まれた。[5]

タケの出生後五日にして明治時代は終わり、皇太子嘉仁親王が天皇になり大正時代が始まる。タケ満二歳の一九一四(大正三)一二月に父金蔵が死去したため、タケに父の記憶はなかったであろう。ただ、昭和期まで佐藤家はタケの母ツネが中心的存在の家であった。実は父金蔵は女戸主であったツネに入夫婚姻で

佐藤家に入っていた。一八九八年(明治三一)公布の明治民法第七三六条では、例外はあるものの入夫は原則としてその家の戸主になったから、金蔵は戸主になったと思われる。[6] ただツネとの結婚期間は戸籍上では僅か一〇年ほどであった。そして、金蔵の死後は、ツネはもう一度女戸主になった。そして、「戸籍」によれば、ツネ満四八歳、タケ満一〇歳の時、すなわち、一九二三年(大正一二)二月一二日、長女クニが満一八歳で雄勝郡山田村字上堂ケ沢菅原政蔵を婿養子として縁組婚姻した。この時点で、政蔵が大黒屋の経営を担うことになった。しかし、政蔵一家は、一九三三年(昭和八)一二月一二日、平鹿郡横手町に分家している。この結果、ツネは満五九歳で再度大黒屋の経営にあたったが、一九四五年(昭和二〇)一月一八日満七一歳で死去し、同年二月一六日、ツネの次男である恒治に家督相続されている。

②西馬音内と大黒屋

ここで秋田県雄勝郡西馬音内という地とタケが生まれた佐藤家(大黒屋)について記しておこう。

雄勝郡西馬音内村は秋田県南部の雄物川左岸の経済・交通の中心地であった。また、亀田藩と本庄藩の本陣が置かれた参勤交代路でもあり、村ではあっても中心部は江戸時代以前から市が立つ商業町でもあった。西馬音内村は、江戸期よりこの村名であるが、一八八九年(明治二二)町村制施行の際には周辺五村と合併したが、村名はそのまま西馬音内村であった(羽後町郷土史編纂委員会編『羽後町郷土史』〔編纂主任国安寛〕羽後町教育委員会、一九六六年)。一八九七年(明治三〇)七月には、町制を施行して西馬音内町になる。この時点で町制を敷くのはめずらしく、この地域が単なる農村地帯ではなかったことを示す。一九二〇年(大正九)の日本全国最初の国勢調査の段階で、世帯数八三五、人口四六七一人の雄勝郡第二位の世帯・人口の町であった(内閣調査局『大正九年国勢調査報告』第一巻)。戦後の一九五五年(昭和三〇)四月一日、西馬音内町は、周囲の農村地帯である五村と明治村の一部を合併して羽後町となった。羽後町の名称は現在に至る。西馬音内は、毎年八月一六日から三日間の夜、彦三頭巾と編笠を深くかぶり、端縫いの衣装で西馬音内本町通りを踊り歩く「西馬音内盆踊り」[7]が有名である。

タケの生家である佐藤家(屋号は大黒屋)は西馬音内盆踊りが踊り歩く本町通りの中心部にあった。佐藤家には、江戸時代の古文書が残されており、前掲『羽後町郷土史』には、佐藤家の江戸中期の経済状態を示す記述がある。佐藤家の古文書中宝暦八年(一七五八)と明和三年(一七六六)の「総勘定目録」によれば、大黒屋は、木綿・古手・ろうそく・半紙・茶・数の子・にしん・塩辛・塩・昆布など他地域(久保田湊か)から領外輸入品を購入して農民に販売し、米・大豆・炭・たばこ・木材など平野部・山間部等の農民生産物を他地域に出す商行為(一部は西馬音内市場に出す)で利潤をあげ、一方で金品の貸借を通じて土地を集積していた。このように、佐藤家(大黒屋)は、江戸期には相当羽振りの良い生活をしていたらしい。しかし、佐藤家(大黒屋)は明治以降いつの時点かは確定できないが、次第に下降線をたどるようだ。[8]

(2)タケの西馬音内時代

タケは、幼児の時には近隣の村である元西馬音内村堀回字元城(もとき)(現

羽後町西馬音内堀回字元城）の下橋家に里子に出される。これは秋田県南部の名称では乳家（チチゲ）といい、比較的裕福な家が子女を里子に出すという制度であった。タケは下橋ウメノから乳をもらい、ウメノの娘のトリを同じ乳姉妹として実の姉のようにして育った。

タケは、満六歳で西馬音内小学校尋常科に入学し、卒業後高等科に進学した。一九二六年（昭和元）三月に高等科を卒業したと思われる。それ以上の進学はない。この時満一四歳。この頃、女子の中等教育もようやく盛んになり始めていた。大正期、西馬音内町には女子の中等教育機関はなかったが、九キロメートル弱の距離の湯沢町には、一九一八年（大正七）湯沢実科高等女学校が創設され、タケが小学校高等科を卒業した年には、秋田県立湯沢高等女学校と改称されていた（湯沢市史編さん委員会事務局編『湯澤市史』秋田県湯沢市教育委員会、一九六五年）。後年タケが子供たちに語ったところによると、教師になる夢があったようであるが、タケの周辺がタケを進学させようとした形跡はない。

高等科卒業後、西馬音内町の地主柴田与之助家[9]で行儀見習い、和裁を習ったらしい。柴田与之助家は西馬音内町きっての大地主であり、花嫁修業のようなものであったと思われる。

結婚前のエピソードとしては、生家大黒屋に下宿していた小学校教師にほのかな好意を持ったことがあったらしい。教員用宿舎のようなものはなかったために、屋敷が大きい素封家の家が町村の要請により教員の下宿になったのであろう。しかも、当時の小学校は大黒屋の裏にあった。おそらくタケの片思いのようなものであったと思われるが、それ以上は不明である。しかし、身内の一人に、「小学校教師のような貧乏なものに嫁にはやれない」、と言われたらしい。小学校の教師は当時そのような位置にあった。

(3)タケの結婚

タケは、一九三五年（昭和一〇）に、雄勝郡湯沢町の高久四郎と結婚する。四郎満二九歳、タケ満二三歳であった。当時の結婚年齢からすれば早くはない。湯沢町役場への婚姻届出は一一月九日であるが、二人の長女美和が一九三六年（昭和一一）一月一〇日に生まれているので、婚姻届出以前に事実上婚姻生活に入ったのは明らかである。結婚後戸籍に入れるのは遅かったようであるが、「足入れ婚」というイメージではない。

タケの夫四郎は、一九〇六年（明治三九）三月三〇日、高久房吉・イノの四男として雄勝郡湯沢町九三二番地（根小屋町）で生まれた。家は代々建設業を営んでいた。昭和初期までとくに金がある家ではない[10]。四郎という名前から明らかなように、男では四番目、八人の兄弟姉妹の六番目であった[11]。四郎が生まれた時、すで

写真１　タケと美和

に祖父辰之助は亡くなっており、父房吉も一九二八年(昭和三)五月一六日、四郎満一二歳の時亡くなっており、それからは九歳違いの長兄彦太郎が家長の位置にあった。

四郎が生まれ育った湯沢町についても簡単に触れておこう。湯沢町は、秋田県南部の横手盆地のなかにあり、佐竹南家の小城下町の様相をもつ県南部の商業・工業の中心地であった。江戸期には羽州街道が通り、雄物川の舟運もあり、院内銀山の近くの町としても栄えた。明治以降は酒造業や木材加工業が盛んであった。とくに酒造業では、明治から大正期にかけて「両関」や「爛漫」などの銘柄の酒をはじめとした数多くの酒造業者がいて、「東北の灘」とも呼ばれた(斎藤実徳・斎藤実則・仙道良次『湯沢・雄勝の地名』川井書店、一九八二年、前掲『湯澤市史』)。四郎が生まれた根小屋町は、近隣の町とともに佐竹町とも呼ばれ、佐竹南家の家中屋敷の中にあった(ただし、高久家は近隣の倉内からこの地に移ったらしい)。湯沢町は、一九二〇年(大正九)の国勢調査の段階では、世帯数一八五七、人口九六二一人の雄勝郡最大の世帯・人口の町であった(内閣調査局『大正九年国勢調査報告』第一巻)。奥羽本線の湯沢駅ができるのは一九〇四年(明治三七)のことである。

一九一八年(大正八)、湯沢小学校高等科を卒業し、これが最終学歴になる。それから一年後、四郎は修業のため東京に行く。一九二三年(大正一二)の関東大震災の復興の建設事業にも参加した。四郎がいつ湯沢に帰ったかは不明である。四郎の家は、四郎の祖父辰之助の時代から「匠家高久」として建設業を経営していた。前述したように父房吉は一九二八年(昭和三)五月死去するが、その二年後の一九三〇年に長男彦太郎は高久組を立ち上げる(雄勝郡人物名鑑刊行会編『雄勝郡人物名鑑』雄勝郡人物名鑑刊行会、一九五四年)。この時、高久組は土木部と建設部に分かれ、土木部門は彦太郎が、建設部門は四郎が担うことになる。四郎は、設計技術に秀でていて、後年であるが、戦後一九五〇年(昭和二五)建築士法によって建築士の資格制度が誕生した時一級建築士になる。

タケとの結婚前に若き四郎が関わった大きな建築物としては、一九三一年(昭和六)の秋田県立湯沢高等女学校校舎建築、一九三二年(昭和七)～三三年(昭和八)愛宕神社建築、一九三四年(昭和九)～三五年(昭和一〇)雄勝鉄道元西馬音内駅舎建築、である。そして、この元西馬音内駅舎建築[12]が四郎・タケの結婚のきっかけになる。

タケとの結婚前に、四郎は近所に思いをよせる女性がいたという。その女性は結核に罹病。愛宕神社建築の際、四郎は現場に寝泊まりし、肉魚を断ち、病気が治るように願をかけ毎日水垢離をして仕事をしていたという伝承がある(高久臣一「木のこころの伝承」『住まい快適通信』三号、二〇〇二年)。しかし、彼女とは結婚まで至らず、その後その女性は結核で病死する。四郎・タケの結婚前のことである。

一九三四年(昭和九)、元西馬音内駅舎建築現場にいた彦太郎は、「乳家」の下橋家に遊びに来ていたタケを見たと伝えられている。彦太郎は、ちょうど弟四郎の行末を心配している時であり、タケを見て、四郎の嫁にできないかと考えたらしい。もちろん現場の近隣の人からタケの素性も聞いていただろう。この後、彦太郎は積極的に動いたようだ。建築現場での四郎は、部下に対して財布を預け、「それで何かを

買ってこい」という姿も伝えられており、下橋家の近くの人には相当に金があるように見えたらしい[13]。この一九三四年という年は、高橋是清の昭和恐慌対策（地域の雇用の促進）として一九三二（昭和七）～三四年の救農土木事業の最後の年であり、道路の拡幅が全国的に行われ、土木業界やセメント業界が活況を呈していく時期であった。元西馬音内駅舎建築は土木事業ではないが、建築業界も不況から脱していく時期であった[14]。

仲人がだれかは不明であるが、タケは兄恒治に説得されて結婚を不承不承に承諾した。ただし、タケがこの結婚を相当に嫌がっていたことを示すのは、湯沢町の高久の家に行くために人力車に乗ったタケがずっと泣きじゃくっていたという伝承がある。これは、タケとともに大黒屋から一緒に高久家に「女中」としてはいった原田キヨ子（「キヨコあっちゃ」と呼んでいた）の証言である[15]。タケのある種性格の激しさを示すエピソードではある。このようにして、タケは見合いもせずに四郎と一緒になった。写真の交換があったかは不明である。

タケは四郎とともに兄彦太郎が戸主をつとめる四郎の実家に同居した。この時、同居は義母イノ、義兄彦太郎・ヨシ夫婦、夫婦の長男健一、長女京子、二男英二、三男洋三、二女アキ、三女恵美子であった。このようにして、タケは高久彦太郎家の大家族の一員になった。西馬音内町で比較的自由に過ごしてきたタケにとっては環境の大変貌であった。

一九三六年（昭和一一）一月一〇日、長女美和が生まれるが、夫婦はよく口喧嘩をしたらしい。原因の一つは、四郎に一時思いをよせていた女性がいたことをタケが全く知らされていなかったこともあるようだ。しかし、大半は大家族の中での生活でのストレスがあったと思われる。ケンカの末、タケは実家である大黒屋に帰ったこともあるようだ。タケは耐え忍ぶ女ではなかった。

（4）四郎の独立と戦時

一九三七年（昭和一二）七月二〇日、根小屋町の兄である戸主高久彦太郎家から湯の原という町の中心部からは離れた地に独立して家と事務所を構え、高久建設という社名で建設業を営んだ。この時、高久組からは大工の棟梁高橋吉之助も高久建設に移った[16]。

この年七月七日には、盧溝橋事件がおきる。泥沼の日中戦争（当時の言葉では「支那事変」）の始まりである。この年のいつかの時点で、四郎は軍隊に召集されている。出征時の四郎と一九三六年一月生まれの美和が同じ写真の中で写っており、美和によると、その写真の美和は二歳になっていないという。四郎が向かったのは中国大陸である。現在年未詳の四月二二日「高久武子」宛「高樹部隊本部小行李高久四郎」よりの軍事郵便が遺されている。「小行李」とは弾薬や器具などを輸送する歩兵の輜重部隊であった。その手紙によれば、約半月の行軍や戦さであったが、食うものがなくてとても困ったこと、「支那人」の空家に入って〈アハ〉（あわ・粟）を焚いて食べたこと、「山西名物の泥吹雪」と昼夜の寒暖の差の大きさに悩まされた、ことなどが書かれている。四郎にはこれ以外に戦地の様相を伝えるものはない。四郎は背は低かったが、頑健な体格であり、戦後になっても、中国大陸

での戦闘についてよく語った。タケは四郎の戦争話が始まるとこれを嫌がり、聞き手はほとんど幼い美和であった。「戦友」の話が多かったという。女の子が相手であり、戦争の生々しい話はなかったようだ。[17] 四郎の愛唱歌の一つは「麦と兵隊」であった。四郎の「凱旋」の日は一九三九年(昭和一四)九月一五日である。なお、四郎の軍隊での最終の階級は陸軍上等兵であった。

一九四二年(昭和一七)四月九日、小学生になったばかりの長女美和(満六歳)が、父四郎の親戚の家に遊びに行き、当時では数少なかった車にひかれ、病院に運ばれた。当初は爪先の怪我であったが、壊疽が始まり結局膝下から切断した。抗生物質ペニシリンがドイツからの情報をもとに国産化されるのはその二年後である(インターネット「ペニシリン　日本」の検索情報による)。美和はそれから義足生活になった。この時、タケは三月二八日長男臣一を出産したばかりでふせており、四郎は出張中であった。四郎は、自分の親戚の家に遊びに行って事故にあったことと、切断のタイミングに迷いが生じたことに責任を感じたらしい。四郎は長女美和を可愛がり、自転車の二人乗りをして高吉(たかきち、湯沢町にあった芝居小屋、映画館)での人形浄瑠璃の観覧にしばしば連れて行った。また、タケは美和を抱きかかえる力がなかったため、美和を風呂に入れるのは四郎であった。四郎はかなり大きくなるまで風呂を美和と一緒に入り、戦後美和の中学校の修学旅行(仙台)、湯沢北高等学校(女学校)の修学旅行(東京・京都・大阪・奈良)に一緒についていった。後者は一週間の旅行で、四郎はその間仕事を休んだ。

戦争末期、家は疎開家族も受入れあふれかえった。四郎・タケ夫婦と子供二人(美和、臣一)、北九州からの疎開してきた四郎の姉(二女石井チヨ)家族、横浜から疎開してきた四郎の姉(長女橋爪ヒデ)家族、一九四五年に入ってきた「女中」の「君さん」(菊地君子)、である。タケは、本家でもないのに、四郎の姉の二家族を疎開先として受け入れざるを得ないことに対して本家とそれを受け入れた四郎に対して不満をもっていたようだ。[18] 夫婦の二女詔子は、一九四五年(昭和二〇)四月五日に生まれており、疎開家族の受け入れ時は、タケの妊娠、出産の時でもあった。しかし、タケは現実を割り切り、食物等を確保したくましく乗り切っていく。

戦局が悪化する中、タケは大日本婦人会(一九四二年二月発足)の勤労奉仕の土方仕事もしなければならなかった。戦争末期のエピソードとしては、ある時竹槍訓練に参加したタケが、「こんなことをしてるようでは日本は敗けるのではないか」と四郎に言ったら、「神国日本が敗けるか!」と当時湯沢町の在郷軍人分会の副会長であった四郎に殴られたという。戦後も含めて四郎がタケに手をあげることはほとんどなかったが、この時はよほど腹を立てたらしい。しかし、それでもタケは言い返すのをやめなかったようだ。

一九四五年(昭和二〇)三月一一日、四郎の甥、彦太郎の長男健一(少尉)が鹿児島県の海軍基地鹿屋より特別攻撃隊で出撃し、エンジン故障を報じたのち、消息を絶った。健一は菊水部隊梓特別攻撃隊の第一中隊第一小隊二区隊の一番機に搭乗したが、これは操縦・偵察・電信の三人の要員からなり、健一は偵察要員であった。健一は、秋田鉱山専門学校採鉱科を卒業した後北海道帝国大学の聴講生になると同時に

北海高等女学校の教師になった。その後東北帝国大学に受験して通るが、入学式前に第一三期海軍飛行予備学生に応募しこれも通り、結局一度も大学の門をくぐることはなかった[19]。健一は、休暇で湯沢に帰って来た時、タケに対して、「おばさん、臣坊みたいな子供達が我々のあとに残ってくれると思うと安心して死ねるなあ」と言っていたという（高久臣一「従兄を偲んで」『時よ』）。「臣坊」とは長男臣一のことで、当時三歳でかなりやんちゃな子供であった。

この年、八月一五日の前に、四郎に二度目の召集令状が届いた。しかし実際に召集される前に敗戦を迎える。

（5）戦後

戦後、「養成校」（職業訓練所の前身）を出た一五～一六歳の若者五人（「アンコ」たち）が高久建設に入り、五人は四郎・タケと同居するようになった。彼らは、四郎を「とうさん」、タケのことを「かあさん」と呼んだ。このほかに四郎の姉である石井チヨの息子の「元ちゃん」（石井元治）が建築の修業のため同居した。また、戦前もそうであるが、当時大きい丸太の製材の機械がなかったため、「木挽きさん」という製材の仕事をする人も仕事の期間だけ寝泊まりしていた[20]。

戦争直後が食の面ではもっともつらい時代であった。湯沢は町場にあったため、米の確保には苦労した。タケは自分の実家がある西馬音内町に羽後交通の電車で行き、帰りにリュックを背負い、それが肩に食い込むのがつらかった、と話をしていた。タケは痩せていて、貧血気味であった。豪雪地帯である秋田県南部の冬場は寒く、「雪のないところに住みたい」とよく言っていた。

戦後、疎開家族はいなくなったが、食べ盛りの五人の「アンコ」たちにまず食事を食べさせねばならなかったために、食べようとしたらご飯がなかったということがよくあったらしい。一九四七年（昭和二二）九月九日、二男嶺之介が生まれた。病弱な子でいつ死んでもおかしくない子であったという。「嶺之介の歯が悪いのは、お腹にいる時ほとんど栄養がとれなかったためだ」とタケはよく話をしていた。風呂は二～三日に一回であったが、それも「アンコ」たちを入れ、自分はいつも最後であった。

やがて五人の「アンコ」たちも少しづつ弟子上りをし、結婚などで高久の家を離れていった。その中には、通いで高久建設に勤める者、あるいは東京に出て行く者もあった。嶺之介が小学校高学年の頃には「女中さん」もいなくなった。仕事も増え四郎は忙しく立ち回っていた。設計図の作成などのときはよく徹夜をしていた。一方で、映画好きの四郎は、小学校の同期生と映画館を買い取り、頼まれて社長になった光座（大映・日活直営館）によく映画を見に行っていた。家族が一緒に食事をするということは大晦日と正月以外にほとんどなかった。食事の時、タケは一番最後に食べ、みんなが食べられる大きなテーブルが導入された後も、一人で小さなちゃぶ台で食べていた。この頃から、タケは腎臓病の兆しがあったらしい。

四郎は、一九六〇年（昭和三五）頃、生命保険加入のため健康診断をしたところ、心臓肥大が発見され、その後家と病院で闘病の末一九六一年（昭和三六）六月一三日に湯沢中央病院で肝硬変により死亡した。

満五五歳の若さであった。この間四郎は病床から美和の結婚を急ぎ、美和は、四郎死去の一か月半前の四月二九日、中学校の音楽教師大山國雄と結婚式を挙げた。四郎は、結婚式には出席できず、病室で美和の花嫁姿を見る形になった。

四郎の死後、高久建設を継いだのは、一九歳で勉学中であった長男臣一であった。しかし、臣一は未成年であったため、形式上高久建設の代表者(当時は法人ではなかった)はタケになった。臣一は数年間、建築の修業のため湯沢を離れるが、その時高久建設を動かしていたのは、四郎と一緒に働いてきた大工の棟梁高橋吉之助(「吉アンコ」と呼ばれていた)と、四郎とタケとともに過ごした四郎の弟子たち(伊藤貞治、石川喜代治、榊原良一ら)であった。そして数年後、臣一が経営の前面に出てくる。

タケは、一九七七年(昭和五二)一〇月頃から腎臓の人工透析を続けていたが、翌年二月一七日満六五歳で死去した。葬儀では、かつて苦楽をともにしてきた「アンコ」たちの泣く光景があった。

二　シゲの昭和史

(1)シゲの結婚まで

一九二〇年(大正九)五月二七日、シゲは雄勝郡湯沢町の近郊農村である雄勝郡幡野村大字倉内(くらうち)で、小原長蔵・キヨの長女として誕生した[21]。倉内は、江戸時代初期雄物川の河港があったところで、湯沢佐竹南家の米蔵が建てられてから倉内となったといわれる。しかし、その後雄物川の川道の変更により河港と倉が江戸中期より後期にかけて他に移ったことによりその後は純農村になった(前掲『湯沢・雄勝の地名』)。家は農家で、自小作であったようである。シゲの生まれた頃、小作は湯沢町の地主冨谷松之助、山内儀助の田畑であった。

注目すべきことは、シゲは自小作農家にうまれたが、一度も農業経験はないとのこと(まったく農業の手伝いをやらないわけではなかったろう)。シゲの言によると、シゲは体が小さいので畑仕事は無理と父長蔵に思われたのであろう、とのことである。ただし、野田公夫(現龍谷大学農学部)によれば、日露戦後、農家では娘に農業をさせず、都市に出し(向都熱)、かわって息子の嫁に農業をさせるという農家が増えていったという。

シゲは、父長蔵を非常に尊敬していたようで、長蔵の人物像を生き生きと伝えている。それによれば、長蔵は、ナスの栽培と鶏の飼育方法で新しい方法を試み、見学者が多く、妻のキヨはその人たちにお茶を出すことに追われるといった光景もあった。一九三一年(昭和六)の頃には、農業恐慌により、幡野村大字倉内にも負債を背負う農家が増えた。負債整理のために倉内にも組合ができ、その規則はきまったが、個々の農民たちが自分の負債を組合に申告するということはなかなかなかったらしい。一九三六年(昭和一一)、三七年(昭和一二)の頃、長蔵は、「むら」(倉内)の集会所で毎晩、借金を明らかにして国に提出する書類を作成していたが、他の人の分も作成していたようだ。長蔵は、倉内という「むら」の経済更生運動の「中心人物」であった。戦後、長蔵は幡野村の村会議員をつとめ、一九五四年(昭和二九)四月、幡野

村が町村合併の結果湯沢市が誕生した時市会議員となった（「昭和二十九年自四月十五日至四月十七日　議会臨時会々議録」湯沢市議会）。なお、敗戦後の農地改革の際には農地委員になった。農地委員の構成は、小作五名、地主三名、自作二名であったが、おそらくこの段階では自作委員であった可能性が高い。この農地委員の仕事は、農民間の調整でかなり大変であったと、とシゲは聞いている。長蔵はよく「むら」（倉内）のもめごとの仲介役をつとめていた。この長蔵のような、地主以外の人物が「むら」の中心人物になっていったことも、昭和戦前期の時代をあらわす特徴であった[22]。また、長蔵は「むら」の集会所で行われる俳句の会にいつも参加するとともに、将棋好きの「むら」の人と時には徹夜で将棋を楽しんだらしい。しかし、長蔵は六〇歳を超えてから糖尿病と後に結核を併発し、自宅療養したが、長い闘病生活を経て一九六一年（昭和三六）一月に満六六歳で死去した。

さて、小原シゲは、一九二七年（昭和二）四月、幡野小学校尋常科に入学、六年後の一九三三年（昭和八）四月に高等科に入学し、一九三五年（昭和一〇）満一五歳で高等科を卒業する。高等科卒業後、一九三六～三七年（昭和一一～一二）の二年間、すぐに東京に習い事に出る。入学したのは「松尾裁縫女学校」（二年制）であった。この時、すでに東京に出ていた叔父二人（小原長次、小原三次[23]）がシゲに何か習わせることがあったら東京に来させないか、といったので、裁縫女学校にいくことにしたという。シゲは叔父の長次と三次のところで生活した。裁縫女学校は月謝無料であり、縫い上がったものをデパートなどに納品していた。生活費は、叔父たちに面倒をみてもらっていた。実家からは米、味噌、野菜などが送られてきた。裁縫学校の授業内容は、ほとんどが裁縫の授業で、少しだけ修身公民という授業があって講師の先生が来たという。東京にこのような形で出たのは「むら」（倉内）ではシゲ一人だけであった。

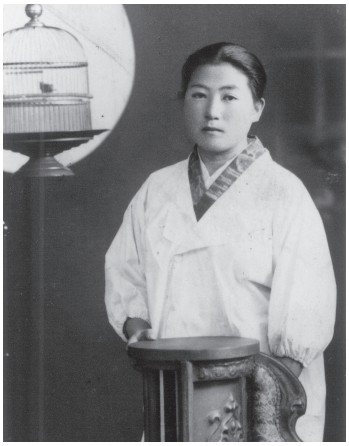

写真２　シゲのトラコーマ治療所勤務時代のものと思われる

二年間の裁縫女学校生活を終えたシゲは、一九三八年（昭和一三）に郷里である倉内に帰るが、その後すぐに、トラコーマ（トラホーム）診療のモデル地区になった幡野村にあったトラコーマ治療所の看護助手になる。シゲの言では、この治療所に二年か二年半ほど勤める。当時、眼病は猛威を振るっており、トラコーマ病患者は相当多かった[24]。

トラコーマ治療所は月から土曜日まで開いており、毎日朝一〇時から勤務し、水曜日は手術の日なので夕方まで勤務した。シゲの給料は良かったらしい。結婚前に何が楽しかったか、という俊子の問いにシゲは、幡野村大字金屋の医者と幡野村役場の衛生係員とシゲと三人で、「石原博士」のトラコーマ撲滅のための講習会に青森県の浅虫温泉に行ったことをあげている。時はトラコーマ撲滅運動が盛んな時代であった。

(2)シゲの結婚

一九四〇年(昭和一五)一一月一七日、小原シゲは湯沢町字田町四三番地に住む(本籍同じ)柏原忠吉・ハルの次男である柏原常松と結婚する。シゲ二〇歳、常松二九歳であった。柏原忠吉は当時田町で茶販売をしていた。シゲによると、結婚式は、親族とごく少数の人びとで、簡単な披露宴を柏原家の奥の座敷であげただけ、花嫁は髪結いなし、ふだんの着物で行われた、という。[25] シゲの住む幡野村倉内と湯沢町田町は五キロメートル程度で近く、花嫁はタクシーに乗って柏原家にやってきた。仲人は倉内の世話役小原林太郎であった。結婚のきっかけは、常松の父忠吉と小原林太郎(シゲは彼を「ムラの人格者」という)が「生活改善運動」の講演で出会い、そこで話が出たようだ。小原林太郎は、忠吉が割合自由にいろんなところに顔を出すのを不思議に思って聞いたら、「硫黄山」に働きにいってる「おんちや」(常松のこと)が良い金をとってくるらしいとのことであった。小原林太郎から話を聞いたシゲの父長蔵は、百姓で苦労しているので、これからは給料取りの方が良い、シゲは小柄で百姓の家に嫁いでも、丈夫な小姑にいじめられるかもしれないからと考え、娘を湯沢町の柏原家に嫁がせることにした、という。

見合いはなく、シゲは写真もみないで嫁いだらしいが、あとで聞くと写真は一枚、長蔵に渡されていたらしい。長蔵がなぜ、娘に写真をみせなかったかは不明であるが、シゲが初めて常松にあった時、常松は「てっぺんハゲ」で坊主頭であったという(俊子の記憶では常松は外出の時には常に鳥打帽子をかぶっていた)。

柏原常松については、岩手県和賀郡岩崎村の和賀仙人鉱業所に就職した際の「履歴書」が残されている。それによれば、常松は一九一一年(明治四四)四月二六日、父柏原忠吉、母ハルの二男として生まれた。一九一八年(大正七)秋田県雄勝郡湯沢尋常高等小学校の尋常科に入学し、一九二三年(大正一二)尋常科を卒業後すぐに高等科に入学し、一九二六年(大正一五)三月高等科を卒業する。これが最終学歴になる。ただ、常松は高等科で優秀な成績で(「全優であった」という)、教師に師範学校への道を進められたが、父忠吉は、家業であるお茶の販売を手伝わせるためにこれを断ったようだ。常松も人と争う性格でなく、とくに上級学校への進学をめざした形跡はない。

それから二年後の一九二八年(昭和三)七月、湯沢町の中心部にある大町の富谷松之助商店に勤務する。[26] そして、それから三年後の一九三一年(昭和六)一一月、新潟県北蒲原郡新発田町株式会社大倉製糸場原料係として勤務する。さらに一九三五年(昭和一〇)三月、秋田県雄勝郡須川村高松(現在は湯沢市)川原毛鉱山に庶務会計係として勤務する。この川原毛鉱山の就職にあたっては鉱山の経営にあたっていた富谷松之助の紹介があったものと思われる。[27]

川原毛鉱山は湯沢町から約二六キロメートル離れた海抜六七〇～八五〇メートルの山地にある硫黄鉱山であった。周辺は無数の硫気孔から強酸性の湯やガスを噴き出す地帯であった。近くには現在秘湯とされている泥湯温泉がある(富谷松之助『川原毛硫黄山』)。常松は、週末しか家に帰れない川原毛鉱山に勤務した。常松の仕事は、一貫して会計

係の仕事であった[28]。会計係であった常松は、月に一度、鉱山で働く人々の給料を湯沢町の銀行から引出し、それをリュックサックに背負い運搬した。最初は一人で、後には一人では危険ということで、警護の人と二人で山と町を往復した。鉱山から遠く離れた銀行から給料を運び出すという重要な仕事を任されていた常松は上司の信頼も厚かったのであろう。

なお、常松は、兵役法に基づく徴兵検査を受けたはずであるが、「履歴書」には「第一補充兵歩兵」とあるが、一度も実際の軍隊経験はない。

シゲと常松が結婚した時、柏原の家には、忠吉・ハル夫婦、常松・シゲ夫婦のほかに、一九一〇年(明治四三)生まれの長男安太郎、三男で一九二一年(大正一〇)生まれの雄三がいた。すでに、一九四〇年(昭和一五)春、常松の妹ヨシ子は県北部の大館町の堺谷家に嫁ぎ、柏原の家にはいなかった。

(3)結婚後と和賀仙人行

結婚後も常松は硫黄山の会計係として現場事務所勤務であった。そのため、常松は週末にならないと山を下りてこなかった。シゲは、夫のいない田町の家で忠吉とハルに仕えた。シゲによると、忠吉は厳しい舅であった。シゲが俊子に語ったところでは、忠吉は「嫁は俺の家がもらったものだからどう使っても勝手だ」といい、ハルは「とつつあ(父の意味、忠吉のこと)の言うことにさからわないでくれ」と言っていた。おそらくシゲは忠吉に逆らうこともあったのであろう。

結婚直後の一九四〇年(昭和一五)一一月、常松が勤務する川原毛鉱山の鉱業権とその設備が富谷家から帝国鉱業開発株式会社に譲渡された。この結果、川原毛鉱山は帝国鉱業開発株式会社川原毛鉱業所になった。新会社の経営開始は、一二月一日である[29]。

この後、常松は川原毛鉱業所を退社し、一九四二年(昭和一七)二月から湯沢町からは奥羽山脈を越えた岩手県和賀郡岩崎村の和賀仙人鉱山株式会社に会計係として勤務する(常松「履歴書」)。この会社は、一九三八年(昭和一三)五月二一日に設立され、日中戦争を契機として鉄鋼需要が増したことに応じて低燐銑鉄の販売を行っていた(『東北電気製鉄株式会社25年史』)。

和賀仙人鉱業所への転職を主導したのはシゲであった。一つは、川原毛鉱山が帝国鉱業開発株式会社に売却された時、常松・シゲ夫婦は、これをきっかけにどこに転勤させられるかも知れないと思ったらしい。もう一つはシゲの思いである。シゲは、この舅のもとで子どもを育てることはできないと考え、湯沢町の家を出ることを夫にすすめた。この時、おそらく父長蔵からの依頼を受けてと思われるが、新しい勤務先を世話してくれたのが、東京で凸版印刷の技術を身につけた後、岩手県和賀郡黒沢尻町(現北上市)で印刷業を営んでいたシゲの叔父小原三次であった。和賀仙人に旅立つとき、忠吉から「何も持っていくな」と言われ、家から持ち出すことができたのは夫婦の蒲団だけであった、という。

この常松・シゲ夫婦が湯沢を旅立った直後の時期、柏原家では、もう一つ大きな出来事があった。一九四二年(昭和一七)一月二五日、常

松の弟雄三が召集されたことである（柏原忠吉「万覚帳」）。雄三は当時湯沢町でもっとも大きな呉服店であった丸京に勤めていた。雄三が所属する部隊は東部百四部隊、「陸軍飛行兵」であった。二月九日、雄三は集合地である宮城県名取郡（玉浦村）の県社竹駒神社に向けて湯沢駅を出発する。忠吉は、この時の餞別金と餞別をくれた人名を「万覚帳」に記しているが[30]。この餞別をくれた人名の記載中に「弐円　黒沢尻　柏原常松」がある。ということは、この年の一月頃には常松・シゲ夫婦は、湯沢町を去り、黒沢尻町の小原三次のところに身を寄せていたらしい。

さらに、この一月から二月にかけて、柏原家での大きな出来事は、常松の妹堺谷ヨシ子が出産のため県北の大館町（現大館市）から実家の柏原家に帰っていて、二月二三日長女和子を出産したという事情である。柏原忠吉の「万覚帳」は、出産六五日後の四月二六日、堺谷家の義母の迎えによりヨシ子が和子を背負って湯沢停車場から大館町に帰る記述がある。忠吉は、湯沢停車場の送りについて、「自分ハ留守ノ為行兼タルハ残念ナリ」と記した。ヨシ子がいつから実家に帰っていたかは不明であるが、忠吉が娘に愛情をもって接していたらしいことは言外に見える。これに対して、「万覚帳」には常松・シゲ夫婦のこと、二人の岩手行については一切記載がない（ただ、「万覚帳」のヨシ子の大館帰りの記事の後に一丁の半分ほどをハサミで切り取られた箇所があり、そこに記載されていた可能性がないわけではない）。忠吉の娘と嫁への接し方は、かなり対照的であったようだ。

なお、出征した雄三は、満州牡丹江省の部隊に配属されるが、一九四五年（昭和二〇）八月のソ連兵の侵攻により、捕虜になりシベリア送りになった。そして、後述するように戦後ソ連のバレー収容所で死亡する。この雄三の死の確認が、その後のシゲらの人生を大きく変えることになる。

（4）和賀仙人での生活

和賀仙人での常松・シゲ夫婦の生活は、戦時中にもかかわらず、比較的平穏だったようだ。和賀仙人鉱山株式会社は、一九四三年（昭和一八）一二月一日、東北電気製鉄株式会社と社名変更している（『東北電気製鉄株式会社25年史』[31]）。

常松が記した「入社後ノ経歴」（下書）によれば、一九四二年（昭和一七）三月会計課の会計係筆工にはじまり、同年七月筆生、翌年三月筆頭心得、一九四四年（昭和一九）三月事務課筆頭と順調に出世していった。黙々と仕事をする会計事務は常松の得意とする所だった。夫婦は、「職長社宅」と呼ばれる社宅に住んでいた。常松は工場の会計係で重宝されたのか、結局応召されることはなかった。シゲは後で知ることになるが、常松には会社から「応召免除願」が出されていたらしい。近隣の人びととの関係も至極良好であった。その友人関係は後に湯沢に帰ってからも長く続いた。「職長社宅」では、台所と部屋の暖房は、薪ではなく電熱器であった。夫婦には、敗戦後も含めて三人の娘が生まれた。一九四三年（昭和一八）八月に長女宏子、一九四七年（昭和二二）四月二女俊子、一九四九年（昭和二四）三月三女澄子である。

しかし、この地にも空襲があった。幼かった宏子は、上空を飛ぶ米

軍の飛行機を何度か見たことがあると記憶している。空襲警報が鳴ると、社宅の山側の防空壕に隠れた。シゲの話によると、仙人への空襲は、一九四五年(昭和二〇)八月、三方を山に囲まれたこの地の山端からB29の編隊が急に表れ、爆弾を投下し、勤労動員の学生が防空壕の中で振動による内臓破裂で死亡したという。[32] シゲは、こんな山奥の鉱山にまで空襲があったことに驚き、この時この戦争は敗けるのではないかと思った、と戦後よく口にしていた。

この地には捕虜収容所もあった。敗戦わずか三か月前の一九四五年五月二〇日に開設された仙台俘虜収容所第十分所である。ここには京浜地区からの捕虜が収容されており、敗戦時の収容者数は三〇〇名で、内訳はアメリカ人一八八、イギリス一〇四、オランダ三、その他五名であった。かれらは収容所から八〇〇メートルの距離の東北電気製鉄株式会社和賀川工場で労働を強いられていた(『和賀の十五年戦争』[33])。シゲはこの捕虜収容所について、この捕虜たちには将校などもいた、と語っている。

(5)戦後

敗戦後、米の確保には苦労した。シゲは、宏子を背負いながら倉内の実家に米をもらいに行った。米はおむつ等を入れた手さげ袋の底に入れていた。汽車は、和賀仙人駅から奥羽山脈をこえて秋田県の横手駅を結ぶ横黒線(現北上線)で横手を乗り継ぎ駅とし、横手駅から奥羽本線に乗り換え湯沢駅まで乗り、そこから倉内まで一時間ほど歩いて行った。切符は簡単には買えなかった。実家から「母急病、すぐ帰れ」という電報を打ってもらい、切符を買ったこともあった。帰途、乗り継ぎの横手駅で、警察官から闇米の検問をうけたが、米とおむつを入れた手さげ袋を、ある時老警察官が「大変だね」と持ってくれたという。シゲはこの時冷や汗がタラタラでたという。この人は名物警察官で、彼に助けられた人々は相当いたようだ。

一九四七年(昭和二二)六月二日、大陸に渡っていた雄三の死亡が「戦友」より忠吉のもとにもたらされる。それによれば、前年一〇月五日、雄三は、シベリアのバレー第五収容所において急性肺炎で病死していた。雄三の葬式は、一九四八年(昭和二三)一〇月五日に行われた(柏原忠吉「柏原雄三　不幸帳」)。同年一月二四日には忠吉の長男安太郎が病死していた。ともかくも、一九四八年の時点では、忠吉・ハル夫婦にとって、柏原家を継いでくれるのは、岩手県の鉱山町にいる常松・シゲ夫婦しかいなくなったのである。

いつの時点からか不明であるが、すでに茶の販売をやめていた忠吉は、老後の不安からか、倉内のシゲの父長蔵に詫びを入れ、常松・シゲ一家が湯沢町田町の家に帰ってくれるよう懇願した(ただし直接常松・シゲ夫婦には詫びはなかったという)。忠吉のたっての懇願を聞いた長蔵からの要請により、常松は和賀仙人の鉱山を退社し、もう一度五人家族で湯沢町田町の家にもどる。それは、雄三の葬式から四年後の一九五二年(昭和二七)のことであった。

このようにして常松は、再度川原毛鉱山に就職する。この間、川原毛鉱山は、一九四九年(昭和二四)に帝国鉱業開発株式会社から富谷家へ売買契約がなされ、さらに一九五一年(昭和二六)八月には富谷家か

ら新たに設立された東北硫黄株式会社に硫黄の採掘および精錬事業が移っていった(富谷松之助『川原毛硫黄山関係年表』、同『川原毛硫黄山』)。常松は、東北硫黄株式会社に再就職することになったのである。こうして、田町の柏原家は、七人の家族になった。

この後、一九六四年の鉱山内の大山崩の事故、鉱害の発生などにより、次第に鉱山の経営は下降し、一九六五年(昭和四〇)年閉山になる(同右)。なお常松は、閉山以前に退職していた。その後は沼館(平鹿郡雄物川町、現横手市)の常松の親戚の醤油製造会社から醤油を仕入れ商いをし、生計を立てていた。これは夫婦二人の仕事であった。

この間、一九六〇年(昭和四〇)頃から、忠吉は脳卒中で介護が必要な状態になった。数年後ハルの介護も必要になった。二人の介護にはシゲがあたった。忠吉は、一九七一年(昭和四六)二月二一日、満八六歳で亡くなり、ハルも同年九月二八日、同じく満八六歳で亡くなった。忠吉は寝たきりの最後の頃「ありがとう」と言ったという。この時シゲは「今までのことは許せる」と思ったと俊子に後に語った。シゲにとって、足かけ六年の介護であった。当時は紙おむつもなく、おむつ洗いが一番大変な作業になった。

忠吉・ハルの死去の五年前、一九六三年(昭和四一)、常松は、五二歳の時、近所にあった湯沢では創業がもっとも古いとされる木村酒造に会計担当として雇われた。会計業務は常松の最も得意な分野であり、七〇代半ばから毎年「進退」を社長に伺いながら結局八二歳まで会計係をつとめた。常松にとって、会社の会計の仕事は生きがいになっていた。

その後の常松・シゲ夫婦は、同居していた大沼重吉(中学校教師から秋田県の教育事務所長等を経て二〇〇三年中学校校長として退職)・宏子夫妻とともに、重吉の運転する車で、東北のさまざまな地域を旅行することを楽しんだ。旅行は、常松がかつて働いていた新潟県新発田市や高等小学校の時の修学旅行の地仙台など思い出の地もあった。

常松は、晩年は足や食欲も弱くなっていったが、一度も寝たきりになることなく、二〇〇五年(平成一七)一二月四日、自宅で老衰のため死去した。満九四歳であった。シゲは、それから五年半後、二〇一一年(平成二三)五月一七日、脳梗塞により満九〇歳で亡くなった。

おわりに

高久タケと柏原シゲの歩んだ道は違うが、共通性も感じられる。負けん気の強さとある種の矜持のようなものである。両人とも自分の夫に対し、はっきりものをいうタイプであった(もちろん我慢をする場面も多かったと思うが)。タケは、趣味の一つに和歌があったが、特に好んだのは百人一首の勝負であった。若い頃、タケはこの勝負ではほとんど勝ったという。タケがもっとも好んだ句は、「瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　割れても末に　あはんとぞ思ふ」(崇徳院)であった。シゲの場合、和賀仙人行は明らかにシゲの主導であり、また舅と姑が介護状態になった時、これをやりきると決意したらしい。シゲは、テレビで格闘技、とりわけプロレス中継を観ることが好きだった。

タケには、大黒屋というかつての素封家の出自の矜持があったと思

う。タケは、「親方衆は贅沢はしない」という言葉を使う場合があった。決して丈夫な体ではなかったが、風呂は最後に入り、食事が最後というのも、家の内は禁欲的に自分が取り仕切るというある種の矜持であったと思う。四郎の弟子たちにも気を使い、そして慕われた。ただし子供達など身内には厳しかった。四郎とはよく口喧嘩をしたが、事業家・技術者としての四郎は充分に認めていた。

また、シゲも、倉内の家に対する矜持のようなものがあった。それは父長蔵に対する尊敬心からきているところが多分にあった。

要するに、タケもシゲも家や夫の言いなりになった女性たちではなかった。

また、両人とも広い意味での教養を身につけていた。二人とも活字好きで、新聞を丹念に読む点では共通していた。タケは若い頃文学少女であったようで、文学・和歌・俳句を好み、自ら句を詠んでいたようであるが、結婚後のある時期からは『婦人倶楽部』『主婦の友』『婦人公論』のような婦人雑誌を読んでいた。新派と新劇も好きであったが、四郎が人形浄瑠璃や義太夫[34]、さらに歴史物(伝記)が好きであったため、趣味はあわなかったようだ。シゲの趣味は、足踏ミシンを使っての裁縫や編み機を使った家族のセーター作りであったが、和賀仙人時代から『文藝春秋』を読みはじめ、湯沢に来てからも定期購読し、死の直前まで読んでいた。要するに、教養は学校教育によって身につけられるものだけではなかったし、文化は多様な形でどの地域でもあったのである。

大正から昭和期の女性について、ある特定の規範(たとえば「良妻賢母思想」)や教育の影響ということが語られる場合がある。しかし、タケやシゲの生き方を見た場合、彼女らの家や日々の生活の中で培われたものが大きかったように思う。

大正から昭和期、そして戦中・戦後、それこそ多様な女性たちの無数の生き方があった。そのほんのわずかの断片を自分の母・義母を素材にして、明らかにしようとしたのが本稿である。

注

(1) 嶺之介の場合、戸籍上姓は「高久」であるが、かなり若い時から「高久」を使用している。兄臣一は「高久」を使用しているが、本稿では「高久」の使用に統一した。

(2) 高久家・柏原家の関係の戸籍は親族の協力も得ておおむね集めた。なお、行論での出生・死亡・結婚などの記載は、とくに典拠を示さないが、すべて戸籍による。

(3) 聞き取りは、最初は二〇〇六年に行われた。筆者は京都橘大学女性歴史文化研究所からの依頼により、同年九月九日、クレオ大阪(大阪市女性協会)で「近代の女性史から見えてくるもの」という題で講演した。この講演の素材が高久タケ・柏原シゲであり、聞き取りはそのためのものであった。高久タケの場合、戸籍以外に文字資料は決定的に少ない。しかもタケは一九七八年(昭和五三)二月満六五歳で死去し、夫である四郎は、それより一七年前一九六一年(昭和三六)六月満五五歳で死去している。そのため、姉大山美和、兄高久臣一、姉地主詔子より聞き取りを行った。この聞き取りの前提に、タケが四郎と結婚した際一緒についてきた原田キヨ子(「キヨ子あっちゃ」)から 姉や兄が四郎・タケの結婚事情等を聞いていたという前提がある。二〇一六年の聞き取りは、本稿執筆のため兄および姉二人への追加聞き取りだった。柏原シゲの場合、文字資料としては、シゲ没後に発見された夫常松の「履歴書」や義父忠吉

の昭和一〇年代の「万覚帳」などが残存しているが、中心的なものはシゲ自身への俊子による聞き取りであった。二〇一六年の第二回目の聞き取りは、シゲは二〇一一年に亡くなったため姉宏子に追加聞き取りを行った。

（4）なお、戸籍上はタケであるが、これは大正期までの女性の表記はすべてカタカナ表記であったことによる。しかし、タケ本人は戸籍にかかわらず手紙などの表記は、常に「武子」と表記していた。これは歌人九条武子にあこがれていたのではないかという推測もある。

（5）佐藤金蔵・ツネの間には、戸籍上では、長女クニ（一九〇四年〔明治三七〕生）、長男正雄（一九〇七年〔明治四〇〕五月一一日生）、二女カネ（一九〇八年〔明治四一〕生）、二男恒治（一九〇九年〔明治四二〕生）、三女タケ、四女トラ（一九一四年〔大正三〕生）の六人が生まれている。この内長男正雄と四女トラが生まれた年に死亡したため、育ったのは男一人と女三人の四人だけであった。

（6）タケが生まれた時、すでに祖父嘉兵衛はいなかった。明治五年（一八七二）一一月八日生まれの祖父嘉兵衛は曽祖父嘉兵衛の次男であったが、一八八六年（明治一九）五月二日数え年一四歳で大黒屋を相続したが、一八九六年（明治二九）三月三一日、数え年二四歳で死亡した。したがって、先代嘉兵衛の四女で数え年二三歳のツネがその三日後の四月二日に相続した。こうしてツネは女戸主になった。ツネは一九〇四年（明治三七）一〇月一五日、同じ西馬音内村の佐藤常吉弟金蔵（明治二年〔一八六九〕二月四日生）を「入夫」として婚姻届出をした。要するに、入夫婚姻では、夫が妻の家に入り、妻の氏を称した。戦前の家制度の中で、妻の家を守るための制度であった。なお女戸主と入夫婚姻の制度については白石玲子「民法編纂過程における女戸主の地位と入夫婚姻――『家』の財産をめぐって――」（『法制史研究』三二号、一九八二年）が詳しく本稿でも参照にした。白石の研究は、入夫婚姻における財産関係を基本的視覚として、入夫婚姻をした女戸主の地位をめぐる法の変化を、明治初年から昭和戦前期までを丹念に追及したものである。ツネ夫婦が結婚した時、一八九八年（明治三一）公布の民法第七三六条「女戸主カ入夫婚姻ヲ為シタルトキハ入夫ハ其家ノ戸主ト為ル但当事者カ婚姻当時反対ノ意思ヲ表示シタルトキハ此限リ在ラス」が適用されるはずであり、ツネが女戸主にこだわるという例外がない限り戸主は金蔵になったと思われる。なお、白石は、この後一九一四年（大正三）改正戸籍法一〇〇条で、入夫が戸主になるためには婚姻届へその旨の記述が必要になり、婚姻届に何ら記載がなければ、入夫は戸主とならず、妻が女戸主のままその地位に留まるという重要な法の変化があったことも指摘している。ただしこの法の変化は、金蔵・ツネの結婚後のことである。

（7）西馬音内盆踊りは一九八一年（昭和五六）に重要無形文化財となる。阿波踊り・郡上八幡盆踊りとともに「日本三大盆踊り」とされる。この盆踊りについては、明応六年（一四九七）の記録をもつ（前掲『羽後町郷土史』）。

（8）一九二七年（昭和二）の帝国興信所秋田支所編纂『秋田県名鑑』（渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧［秋田編］』日本図書センター、一九九五年）では、佐藤ツネは「直接国税拾五円以上納税者」の中では西馬音内町で二七番目の納税額であるが、地租額では一六番目の順位である（地租額三三円）。この順位は、筆者が想定していたよりは低い。現在大黒屋の裏は小学校であるが、その土地のかなりの部分がかつて大黒屋の土地であったということを聞かされていた。なお、「直接国税」とは、地租と所得税からなり、「直接国税一五円以上」とは一八九〇年（明治二三）第一回衆議院議員の選挙権者の納税額で、この時日本全国での有権者の人口比率は全人口の一・一％であった。

（9）柴田与之助家は、一八九〇年（明治二三）四月刊『秋田県管内名士列伝』では地租八三二円、所得税四七円の納税。一九二四年（大正一三）の「五十町歩以上ノ大地主」の名簿によれば田畑一九六町歩八反の大地主であった（前掲『都道府県別資産家地主総覧［秋田編］』）。

（10）一八九〇年（明治二三）刊『秋田県管内名士列伝』中「直接国税拾五円以上納税者」（前掲『都道府県別資産家地主総覧［秋田編］』）には、湯沢

町で六五名が記載されているが、その中に高久辰之助の名はない。また、一九二七年（昭和二）の帝国興信所秋田支所編纂『秋田県名鑑』（同右）では、「直接国税拾五円以上納税者」の中に高久房吉の名はない。

（11）房吉・イノとの間に、長女ヒデ（一八九三年〔明治二六〕生）、二女チヨ（一八九五年〔明治二八〕生）、長男彦太郎（一八九七年〔明治三〇〕生）、二男隆次郎（一九〇〇年〔明治三三〕生）、三男安之助（一九〇三年〔明治三六〕生）、四男四郎、三女ヒサ（一九〇九年〔明治四二〕生）、五男五郎（一九一四年〔大正三〕生）の五男三女があった。

（12）一九二八年（昭和三）八月私鉄雄勝鉄道、湯沢駅―西馬音内駅間開通し、一九三五年（昭和一〇）二月、西馬音内―桧間が開通し、元西馬音内駅舎も完成した。なお、この雄勝線は一九七三年（昭和四八）四月全線廃止になった。これは並行する湯沢―西馬音内間の道路が完全舗装化されたことが要因になった（若林宣『羽後交通雄勝線　追憶の西馬音内電車』ネコ・パブリッシング、二〇〇三年）。

（13）金があったとは思えないが、四郎は豪気な行動をとる側面と、こと商売に関しては信用を重視して緻密な計算をする男であった。

（14）一九二九年から始まる昭和恐慌は、満州事変が起きた一九三一年（昭和六）をピークとする。秋田県の米価は、一俵当たりの米価は、一九二八年（昭和三）一二円六銭、二九年一一円一四銭、三〇年九円九六銭、三一年六円九六になった。翌年から米価は上がり始め、三二年七円八四銭、三三年八円二三銭、三四年九円九五銭、三五年一一円三三銭と回復基調になる（「秋田米価の歩み」）。

（15）原田キヨ子の話の中でタケが湯沢にやってくるとき、馬そりに乗って来たと記憶しているものもいる。

（16）四郎が独立し高久建設を創業するのは一九三七年であるが、四郎本人は高久建設の創業を四郎がはじめて東京に修業に出た一九二〇年（大正九）としている。

（17）四郎が戦争話を美和によくしたというのも、戦地に行った時期と戦闘行為の内容に関係あるのであろう。もちろん日中戦争でも、上海事変など日本人にも数多くの死者が出たし、四郎も顔面に弾丸がかすめる場面にも遭遇し、また高熱を発し野戦病院に入ったこともあるようだ。それでも戦争末期の死者と餓死者が大量に発生する時期とは異なる。この点は、とりあえず、吉村昭『戦艦武蔵ノート』（岩波書店、二〇一〇年）の次の言葉が当をえていると思われる。

> 戦争に対する見方は、その年齢と広い意味での教養によって、千差万別なのだ……と。そしてさらに、教養というものが、かぎられた日本人にしか与えられていなかったことを考え合わせると、生まれ育った時代的風土、戦争を経験した折のその年齢的風土によって峻厳な差異があるのだということも……。

なお、戦後のことであるが、四郎は臣一には、中国には立派な若者がいたということと、戦争はしてはならない、と言っていたようだ。

（18）北九州の石井チヨ家族の疎開は、B29による日本本土空襲の始まりである一九四四年（昭和一九）六月一六日の北九州爆撃とそれ以後一一月までの合計八回の空襲によるものと思われる。また、横浜の橋爪ヒデ家族の疎開は、一九四五年五月二九日の横浜大空襲の前か後かは不明である。疎開の二つの家族が同居したことはなく、それぞれ時期は異なる。

（19）健一については、高久彦太郎『海軍飛行予備学生――戦没教師と女学生の手紙』（自由アジア社、一九五六年）、白鴎遺族会編『雲ながるる果てに　戦没飛行予備学生の手記』（出版協同社、一九五二年、一九八五年河出文庫から出版の際「戦没海軍飛行予備学生の手記」と「海軍」が付加）、藤野一茂『時よ』（私家版、二〇〇〇年）、神野正美『梓特別攻撃隊――爆撃機「銀河」三千キロの航跡』（光人社ＭＦ文庫、二〇〇七年）。

（20）木挽とは、製材が機械化する以前に大鋸によって原木から柱や板などにする業者のこと。

（21）長蔵・キヨの間には、長男長右衛門（一九一七年〔大正六〕生、一九三五年（昭和一〇）八月ツツガムシ病のため死亡）、長女シゲ、二男悌蔵（一九二三年〔大正一二〕生）、三男悌次（一九二六年〔大正一五〕生）、

二女恵子（一九二九年〔昭和四〕生）、四男繁（一九三一年〔昭和六〕生）、五男十三三（一九三五年〔昭和一〇〕生、三女和子（一九三八年〔昭和一三〕生）の八人の子どもがいた。

(22) 一九五四年（昭和二九）に発行された前掲『雄勝郡人物名鑑』の「幡野村村会議員　小原長蔵」の項目では、次のような人物像を記している。

明治二十七年生まれといえば、数え年の六十で、昔ならば人生の下り坂、そろそろ焼きが回ってきたなどと陰口を云われる年頃である。その六十歳の氏は村では革新的理想の持主だとされている。人間は年ではないといわれる所以でもある。村の小学校卒業後、地道な農業をつづけて来たが、農業会発足以来理事に選任され、農地委員は二期、農業委員制度に改組されると学識経験者として、委員に推薦を受け、幡野・弁天水利組合が出来ると議員に推された。こうした経歴を見ると、決してただのお百姓さんではなかったことが想像される。殊に農地委員当時は小作人側のよき味方として、農地改革の実現に大役を買ったことは村民の記憶にもまだ新しい。

氏は常に、明朗な郷土を建設したいと云っている。明朗な郷土建設とは言葉は美しくて、誰の口からも出る常識語だが、いざそれを具体化する段になると、生やさしい仕事ではない。次から次のと障害が起こって来るのが常識だ。それを氏はやってみたいと云う。だから相当の決心を持ってのことだろう。

この文が書かれてしばらくして長蔵は結核になる。

(23) 小原長次は、長蔵の父である長吉の次男、小原三次は長吉の四男である。

(24) 無明舎出版編『秋田県近代総合年表』（無明舎出版、一九八八年）によれば、一九〇九年（明治四二）、トラホーム患者が、雄勝郡山田小学校（雄勝郡山田村）で四九％、深堀小学校（山田村のもう一つの小学校）で五四％とかなりの高率であった。雄勝郡はトラホーム患者が相当出たようだ。さらにまた、京都での例であるが、一九二二年（大正一一）、京都府警察部衛生課が調査した京都府紀伊郡上鳥羽村塔ノ森（現京都市南区）の「保健衛生調査」では、塔ノ森では病気を抱えている疾病者の内、トラホーム病はかなりの割合であった。すなわち塔ノ森の戸数七七戸、人口四〇四人の疾病調査では、健康診断の人員は四〇一人で、複数の疾病を抱えていることから総数五八七人に対して、第一位が口腔および咽喉病（ほとんどが虫歯）で二四七人（四二・一％）、第二位の寄生虫病二〇四人（三四・八％）についでトラホーム病が第三位で九三人（男三五人、女五八人、疾病者全体の一五・八％）であった（拙稿「大正期の衛生状況――京都府紀伊郡上鳥羽村塔ノ森――」京都橘大学女性歴史文化研究所『クロノス』三五号、二〇一三年）。

(25) なお、シゲの九歳違いの妹恵子は、一九五一年（昭和二六）二月、平鹿郡十文字町の小川儀一と結婚するが、この時は、小原家ではきちんと花嫁道具を用意していて、シゲは自分の時との違いをうらやましく思ったと俊子に話している。長蔵が村会議員の時代で、小原家も経済的には上昇していたことがうかがわれる。

(26) 株式会社とみやのホームページ（www.kk-tomiya.co.jp/menu01.htm）によれば、富谷家は寛政九年（一七九七）頃から川原毛硫黄山を経営し、硫黄を大坂方面に販売する一方、生活用品（綿・呉服・紙・茶・ローソク・陶器・墨・算盤・鰹節・昆布など）の仕入・販売を行ってきた。明治末期の一九〇〇年代には「富谷松之助商店」として、紙・文房具・度量衡の小売業を営み、大正期には紙・文房具の小売・卸業として秋田県の県南全域に販売していた。

(27) 川原毛硫黄山の採掘が久保田町（現秋田市）の帯屋彦右衛門に久保田藩から許可されるのは元和八年（一六二二）のことであるが、湯沢在住の七代目富谷松之助が川原毛硫黄山と川原毛温泉の御請山を許可されるのが寛政九年（一七九七）。慶応二年（一八六六）には久保田藩が松之助に川原毛硫黄山の永々御請山を仰せつけられ、維新後の明治三年（一八七〇）には改めて久保田藩から川原毛硫黄山の永々御請山を仰せつけられた（富谷松之助『川原毛硫黄山関係年表』富谷松之助、一九七九年）。

(28) 常松が後述する一九四二年（昭和一七）に和賀仙人鉱業所に就職するために作成したと思われる「履歴書」（下書）によれば、会計係のかたわら、一九三七年（昭和一二）一月には川原毛鉱山の火薬係員拝命、翌年七月に

は健康保険委員、九月には衛生係員を兼務していた。そして一九四〇年（昭和一五）三月には、川原毛鉱山鉱業報国会役員に選任されている。

(29) 前掲『川原毛硫黄山関係年表』、富谷松之助『川原毛硫黄山』富谷松之助、一九九三年。『帝国鉱業開発株式会社社史』（帝国鉱業開発株式会社、一九七〇年）によれば、この会社は一九三九年（昭和一四）八月一七日に帝国鉱業開発株式会社法によって設立され、日中戦争から太平洋戦争を通じて、「融資によって中小金属鉱山を育成し、また自らも六十有余の大小鉱山を開発経営した」大規模な国策会社であった。川原毛鉱山は一九四二年（昭和一五）一一月この国策会社に買収された。

(30) 餞別をくれた人名は一七九名、このほかに大日本国防婦人会湯沢町分会からは千人針腹巻一筋や尋常高等小学校の女性教師から「大君の御楯となりし教へ子の今日のいて立ち送る嬉しさ」という色紙もあった。また、餞別には、湯沢町男子国民学校、女子国民学校、家政女学校からのもあった。

(31) 社名変更の理由は、一九四三年五月にそれまで低燐銑鉄の販売とともに、石灰窒素の製造を一時中止し、低燐銑鉄一本に力を注いだが、会社名が製鉄事業の内容を表さないため製鉄を象徴する社名に変えたという事情であった。（『東北電気製鉄株式会社25年史』東北電気製鉄株式会社、一九六三年）

(32) 加藤昭雄『和賀の十五年戦争』（ツーワンライフ、二〇一五年）では、和賀仙人への空襲は、八月一〇日午前八時頃で、焼結工場が爆破され、二度目の爆撃で「山神社」の森の中に避難した水沢商業学校（現水沢商業高等学校）の勤労動員の学生一名が被弾して死亡したとしている（ただし本書ではB29ではなくグラマン機）。

(33) この捕虜収容所では一名も死者は出ていない（前掲『和賀の十五年戦争』）

(34) 湯沢は素人義太夫が盛んな町であった。四郎の兄彦太郎は、昭和初期、東京から湯沢町に出張してきた義太夫の師豊沢龍太郎の門人になり、一九五二年（昭和二七）の第五〇回東都五十議会に初出場し、第一位を獲得した。「龍司」という名を持っていた。湯沢の義太夫会の会長にもなる（前掲『雄勝郡人物名鑑』）。

追記

本稿の後半、柏原シゲの部分は聞き取りや資料収集には妻俊子があたった。また全体を通して筆者の兄臣一、姉美和・詔子、俊子の姉夫婦大沼重吉・宏子には聞取りや戸籍などの資料収集で全面的に協力をいただいた。親族ではあるが、お礼を述べたい。